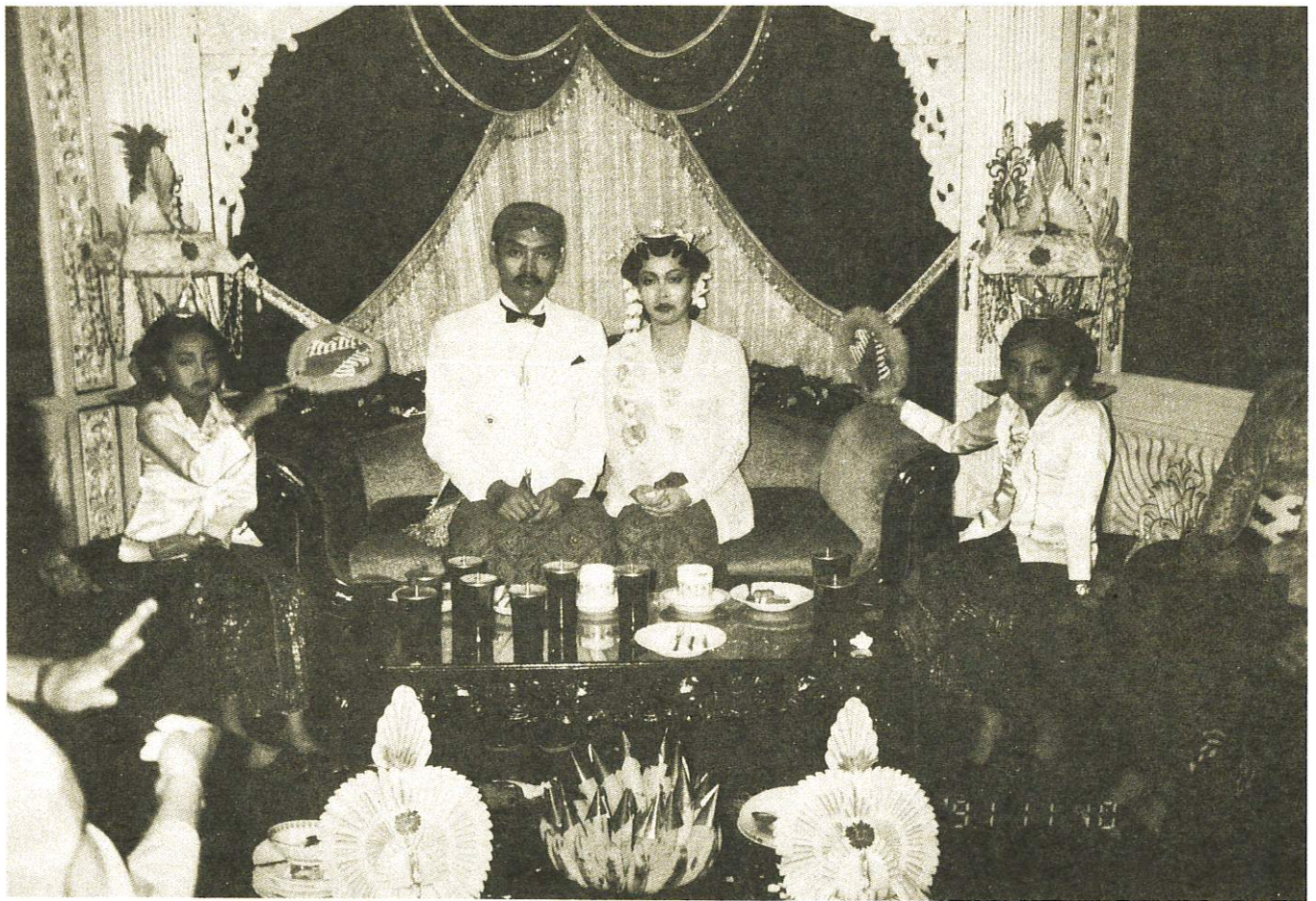


開発 教育 ニュースレター



No. 43

1993. 7

ジャワの結婚式

ジャワ島の古都ソロで行なわれていた伝統的な結婚式。ジャワの人々は、結婚式のために親戚みんなで、お金を出し合い、出来るだけ沢山の人を招き、ごちそうでもてなします。結婚式の盛大さは、その一族の誇りとなるのです。

国際理解ゲーム(教材)
移民・移住と多民族社会

- ねらい
日本社会の多民族性を明確に認識させ、今後の共存のあり方を考えていく
- 対象
高校1年生以上の現代社会
- 全体概要と方法
 - 教材「世界の動き」
方法、シュミレーションゲーム
内容、世界の「ヒト」の流れ
 - 調査講義
日本は多民族社会である
複数の国の人が共に生きている
 - 教材「他の国に移り住む」
方法、シュミレーションゲーム
内容、自分が海外に移住したら
 - 調査講義

例1

日本の外国人労働者の急増(現状認識)
なぜ日本に来るのか?
↓
例としてバングラデッシュの
困難な生活(ロールプレイ)
↓
外国人労働者が日本に来た時にぶつかる
問題・受入れなどに関する現状(調査)
外国人とのよりよい付き合い方、
共存を考える(プランニング)

例2

在日朝鮮人・韓国人問題(現状認識)
なぜ日本にいるのか、歴史的背景
↓
国籍(婚姻・パスポート)
職業等をめぐる(ロールプレイ)
↓
問題解決に向けて(プランニング)

教材「世界の動き」

- ねらい
世界のさまざまな人々が移住するいろいろな理由、ならびに「どこからどこへ」動くかを示していく。そして、その多様な理由を確認する。
- 所要時間 30~40分
- 材料
 - 世界地図(大)のコピー1枚
 - 色毛糸
 - 三角形のカード(方向を示すためのもの)
 - 画紙
 - 「だれがどこへ行ったか」のカード (事項参照)
 - 「なぜ、彼らは行ったのか」のカード (事項参照)
- 方法

- 自分たちの使うカード、それぞれにあわせて毛糸を切る。地図を横切る長さが必要。
- 参加者全員が見え、しかも手の届く位置に地図を置く
- 参加者は二人一組になる。
- それぞれのペアに「だれがどこへ行ったか」と「なぜ、彼らは行ったのか」のカードを一枚ずつ配る。この2枚のカードは、内容的に整合していないこと。
- 参加者に自分たちの持っている「だれがどこへ行ったか」のカードと、整合するようなカードを持っているペアを探すよう指示する。
- 必要なカードを見つけたら「なぜ、彼らは行ったのか」のカードだけ交換して、着席する。他のペアは、探し続ける。
- すべてのペアが着席後、ペアの一人は自分たちのカードの特徴は何で、何で故郷を出ていったのか、全体的に説明する。同時に、もう一人は、地図のその国の付近に自分たちのカードを貼る。その後、色毛糸と三角カードを貼って、行き先の国を示す。
- 最後に人々が移動する多様な理由を確認する。
 - 例1: 経済的理由・より多くの収入を得るため
 - ・失業しているから
 - 例2: 政治的理由・弾圧政権を逃れたいから
 - ・宗教の自由がないから
 - ・人種攻撃がはげしいから
 - 例3: 社会的理由・家族や友人と一緒に住みたいから

教材「自分が海外に移住したら」

- ねらい
「自分が海外に移住した」と想定することで、移民の人々が直面するであろう問題を共有する。
- 所要時間 30分
- 材料
黒板または模造紙
- 方法
 - 参加者を二人一組または三人一組に分ける。
 - 各グループごとに「たった今、移住先の土地についたばかりで何もわからない」と想像してもらおう。(参加者の誰も行ったことのないような国を使う)それから、到着直後に直面すると考えられる問題点をあげてもらおう。
 - そのリストづくりに15分配分する。次にそのリストを全体で一つに整理してまとめていくように指示する。
 - 以下のような点を討議項目とする。
 - ★受入れ側の人々は、移民が直面する問題に、何らかの責任があるのだろうか?もしあるとしたら、どのような責任があるのだろうか?
 - ★そのような状況を変えていくには、どうしたらいいだろうか?

「だれがどこへ行ったのか」のカード

安里健一 1930年 沖縄からブラジルへ	ドー・チー・ラン 1990年 サイゴンから相模原市へ
山西明人 1978年 日本からインドへ	楊黒竜 1988年 中国黒竜江省から川崎市へ
小貫香里 1988年 牧方市からシンガポールへ	クメルダ・アキド 1979年 ネグロスから大阪へ
金田陽一 1940年 釜山から大阪へ	ムハメド・アッラ 1990年 バングラデシュから日本へ
クルム・アカベ 1810年 アイボリーコーストから ニューオリンズへ	カトリーヌ・ファーン 1991年 ウイスコンシンから ストックホルムへ
サンタアラ・コロンボ 1988年 スリランカからインドへ	サルファン・アトラ 1989年 トルコからドイツへ

「なぜ、彼らは行ったのか」のカード

日本の企業の海外での活動が活発になるにつれ、海外勤務の企業人の数、そしてその家族として海外に生活する子供の数は急増しています。彼女もその一人で、1000人以上の生徒を抱えるアジア最大の日本人学校の生徒です。

小さい頃から、森の中で育ち、7人兄弟の長女として大きくなった。しかし、日本への木材の輸出がここ数年で大幅に増加し、森がどんどんなくなったため、森の生活は成り立たなくなった。6人兄弟の面倒をみなくてはならないため、日本に渡った。大阪の繁華街ショウパブで働いている。とても疲れるが、一晩働けば本国での一カ月分のお給料が貰える。

15才になったので、親類をたよって連絡船のついでに港町へ着くが、親類はもういなくて困っていた。すると親切なおじさんが、働くところを斡旋してくれた。同じような人と10人で列車で飯場につれていかれ、寒風の中、淀川ぞいの運河掘りをやらされる。御飯をどんぶり一杯食べられるのはうれしい。だけど、約束してくれた賃金をもらえないのが悲しい。海峡をはさんだ半島の南端の港町に住む家族に仕送りが出来ない。

彼は大阪出身のごく一般的な27才の若者だった。受験を突破し大学に入り、経済好景気の中で無難に就職した。日夜働くまで企業のために働く日々。しかしある日、そんな自分に嫌気がさした。よし、単身で旅に出て、もう一度人生を見つめ直そう。彼は、ゴアからボンベイへ向かう船で月を見上げながら28歳の誕生日を迎えた。

父は18歳の時、満蒙開拓団の一員として長野からチチハルへやってきた。20歳の時、同じ開拓団の女性と結婚し、彼が生まれた。ソ連軍との戦いで家族とはぐれ、中国人夫婦に育てられたが、48歳になって、日本に妹がいるとわかり、帰国した。日本語が全くわからず、中国では農村に居たため、日本で就職できない。

ダッカに出てきた彼は、リキシャの運転をしながら生活をしてきたが、いなかにいる家族に仕送りができず、ついに食うや食わずでためたお金で海外行きを決めた。言葉や習慣がちがいが、辛い毎日だが、必死でやるしかない。

子供を含む男女32人をのせて、南シナ海を漂流中の小型貨物船が救助され長崎に上陸した時、彼女は16歳だった。父は戦死し、母は戦火の中で分かれて以来会っていない。もう国に帰らず、日本で学校に通いたいと思っている。

学校を出たものの、働き口はなかなか見つからなかった。18歳の彼を頭に兄弟は5人おり、現金収入がなければ家族を養えない。フランクフルトの建設現場で働けば、仕送りとお金が同時に出来ると聞き、借金で旅費をつくって出かけた。

アルファ・ラバル社のアメリカ支社に勤務していた父が、5年間の本社勤務となった。スウェーデンは、教育面、社会福祉が充実しているため、家族で渡ることになった。

同じ恩納村から先に移住した人々を頼って、長い船旅に出た。サンパウロ州には広い土地があり、懸命に働けば農園が持てる。苦しい生活を送っている家族や親戚を、はやく呼び寄せたい。

奴隷としてアメリカに強制的に連れて行かれた。大金持ちの地主に売られ、毎日働き続けた。何百万人という仲間が一緒にいたが、労働はとてつらかった。

空軍に所属していた彼は、国の産児制限、農業政策に不満をもち、練習中に戦闘機で高雄に亡命した。

この教材は、第4回ワグジョップの時にその参加者が作成したものです。詳細は、機関誌「開発教育24号」に掲載予定。

本の紹介

『開発教育ハンドブック』

『月刊国語教育』'93. 5別冊

東京法令出版

編集＝川本信幹・藤森裕治

定価 1300円

この本は、学校教育へのディベートの導入の仕方と実践例を示したものである。ディベートとは、賛否の意見がはっきり対立する課題について、2組のチームがそれぞれの立場で対立討論することを言う。それぞれのチームの代表者は、自分個人の見解にかかわらず、その立場に徹底した立論を行わなければならない。

学校教育にこのディベートを導入することの効用として、この本では、生徒が主体的な問題意識を持つようになる、論理的な、幅の広い考え方ができるようになる、等を挙げている。また、ディベートは、教師からの一方的な価値観の注入を排除し、物事を複眼的にみることを可能にする学習指導形態でもあるという。

このディベートハンドブックの実践レポートに、千葉県の中学校の社会科で「ODA、是か非か—インドのダム開発」というテーマでディベートを実践した善財利治教諭の例が載っている。

8名の生徒を4名ずつに分け、インド・ナルマダ川開発について賛成側と反対側を決める。両グループそれぞれに対して4回づつ事前指導を行い、資料を渡して準備をさせた。実際のディベートではインド住民と日本政府が、制限時間内に立論・質疑応答・反駁・結論を交互に行う。それぞれ当事者の立場で討論を組み立てるので、一方的な議論にはなりにくいようだ。ディベート後の作文に、「住民が本当に望んでいる援助をしてほしい」「現地の政府だけでなく、住民ともよく話し合っしてほしい」という意見とともに、「対立

する両者に協調してほしい」という意見が多数あったということに、ディベートの利点が出ているのではないだろうか。

開発教育的な事例は1件、入っているのみであるが、教室ディベートの組み立て方が細かく説明されているので、学校教育関係者には非常に参考になる点が多い書だと思われる。

『開発教育論としての第三世界』

久保田 順編著

文眞堂

定価 3600円（東和大学国際教育研究所に申し込むと定価の2割引）

本書は、1982年に出版された「自力更生論としての第三世界」と同じ共同研究メンバーによって編成されたものである。一見、開発教育とは直接関係がないようにも思われるが、開発教育の目的は何であるかを基本的に考え直すためには、この本は最適であろう。途上国の開発問題を自分に関連づけて考えられる人間を育てることが「開発教育」であるなら、「市民連帯＝第三世界の人々との共同作業」とは、まさに開発教育の延長線上にあると言わなければならないだろうからである。

この本は、大きく2部に分かれており、第1部は「第三世界をめぐる市民連帯の理論」として、先進国のNGOの途上国及び国内での活動、パウロ・フレイレの教育思想等を扱っている。第2部は「第三世界諸地域にみる市民連帯の展開」と題され、スリランカ・サルボダヤ運動、タイの農民運動、韓国の労働運動、アマゾンにおけるゴム樹液採取労働者の闘争、といった内容になっている。

欧米では、NGOの国内活動や学校・社会教育の枠を超えて、自治体の技術協力や人材交流までに「開発教育」の領域が広がっていることはよく知られている。日本の開発教育の今後を考えるために、是非、目を通しておきたい一冊である。

作業学習 - 二つの世界か一つの世界か

これはユニセフの EDev News, 1993年3月号に紹介されていた開発問題学習活動の事例である。ロンドンのチャリテプロジェクト作成の8-13歳児対象のビデオパックに基づいている。

目標：飢餓や発展途上国や援助などについて一般に信じられている考え方を検討して、世界についての違った見方があることに気づかせる。

準備するもの：後にでてくる作業用シートを必要数だけ。児童が意見や絵をかく大きな模造紙、フェルトペンなどを必要数。

学習活動：クラスを七グループに分けて、一グループに一枚ずつのA作業用シートを渡す。グループではその内容を討議し（正しいとか間違っていると判断することを求めるのではない）、その結果の意見を模造紙にかき、そのシートに書いてあることを意味する絵や漫画、スローガンなどを自由に表現する。それが終わるとBの作業用シートが配られ、同じ作業がグループで行われる。

作業が終わると教師は各グループの模造紙をA/B別にはりだして、みんなで検討することを求める。教師は適宜「AとBとの間に共通なところがあるかな」「Aに書かれている発展途上国のイメージは全体ではどういうことかな」「Bに書かれている世界のイメージはどういうことかな」「どっちの絵がかきやすかったの」「どの絵がもっとも本当らしいかな」などと質問をしながら、世界についての二つの見方があることに気づかせる。

作業用シート：

- 1 A 世界は一人一人が十分に食べられるだけの食糧を生産していないので、人々は飢えている
- 1 B 世界にはすべての人に十分だけの食糧がある。しかし平等に分けられていない。
- 2 A 発展途上国は多くの自然災害を蒙っている。それが大きな飢餓と貧困の原因になっている。
- 2 B より豊かな国には洪水、地震（そして汚染問題）のような災害がある。
- 3 A 栄養不良は発展途上国の問題である。食糧が十分でないことを意味する。
- 3 B 栄養不良は十分な食糧が得られないことの問題ではなく、バランスのとれた食事で望ましい種類の食糧をとっているかどうかの問題である。ポテトチップと甘いお菓子だけ

- 4 A 貧しい国には十分な食糧を生産する技術や道具、化学肥料のような材料がないから、いつまでも世界から飢えがなくなる。
- 4 B 発展途上国では豊かな農民だけが北の工業国から輸入する高価な道具を手にすることができる。それでは貧しい農民の助けにならないし、豊かさと貧しさの溝は広がっていく。
- 5 A 世界の飢餓を解決する一番良い方法は豊かな国が貧しい国へもっと食糧を送ることである。
- 5 B 長い目で見た世界の飢餓の解決方法は、貧しい国がもっと食糧を生産できるようにすることであり、その農産物が世界の市場で公正な値段で取り引きされるようにすることである。
- 6 A 発展途上国の政府は、貧困と飢餓の問題にあまり気をくばっていない。政府はその資金を妥当に使っていない。
- 6 B 豊かな国でさえも、教育や健康のための資金の出所がどこであるべきかということについて意見に不一致がある。
- 7 A 私たちは、アフリカの国が私たちに与えているよりも多くの金を、アフリカの国に与えている。
- 7 B 多くの発展途上国は、豊かな国からお金を借りて、利子をつけて返済するということを続けている。1986年にアフリカは援助で受け取ったお金よりも多い金額を工業国に返済した。

どんな子どもたちの反応がでてくるのか、どなたか実際に試みてください。

紛争下の子どもたち

ユニセフ キット頒布中

日本ユニセフ協会では「紛争下の子どもたち—小さな犠牲者とユニセフ」というキットの日本語版を作成した。残部がある間は無料で頒布しているので、必要部数、団体名、住所、電話番号、担当者名を明示して申し込むこと。

また同時にユニセフ視聴覚ライブラリー1993年版として、貸出し可能なフィルム、ビデオ、スライド、開発教育キット、写真セットなどの解説つき目録を刊行した。いずれも申し込み先は〒160東京都新宿区大京町31-10 第一大京ビル内 日本ユニセフ協会 (Tel03-3355-3223)。

難民の子どものビデオテープ

日本語版ができました

国連難民高等弁務官駐日事務所では難民問題のビデオテープを数種類、貸出し用として用意しているが、そのうち難民の子どもの生活と子どもたちの願いを描いた14分のビデオ「ほんのちょっと変えてみよう」の日本語版ができて、貸出し（送料は有料）と実費（2500円）頒布をしている。そのほかにも難民問題の資料やキャンペーン・グッズも用意しているので、関心のある方は〒107 東京都港区南青山1-1-1新青山ビル西館の同駐日事務所広報室まで問い合わせのこと（Tel 03-3475-1615, Fax 03-3475-1647）。

デット スワップ

新しい開発協力の方法

債務（Debt）交換（Swaps）という新しい開発協力の方法が注目を浴びているようだ。1987年ごろから始まったこの方法は、環境や教育、農業などの分野で、すでにその有効性が証明されているという。

多くの開発途上国が債務に悩まされていることは周知の通り。その債務のうち、民間銀行の債権にかかわるものを、開発関係団体や機関が割引いて買い戻す。債務をもっている途上国政府は、債権購入者に購入価格を上回る金額を現地通貨で支払い、それが特定の開発活動に当てられていくという方法である。コンサベーション・インターナショナルとボリビア政府による65万ドルの債権・自然交換協定、世界自然保護連盟とエクアドル政府との百万ドル交換協定が発端となって、これまでに最大、75千万ドルの途上国債務が、開発と環境保護の資金に転換されたと見積られている。最近の例では、アメリカのリバースラインドネス財団がナイジェリア政府の債務百万ドル相当分を60パーセント引きで債権保有の民間銀行から購入し、それに対してナイジェリア中央銀行が50万ドル相当分をナイジェリア・ナイラで支払い、それがナイジェリアでのリバースラインドネス対策に使用されたという報告がある。途上国の債務負担をすくなくし、民間銀行の債権回収不能の恐れをすくなくし、途上国の開発関係に資金がまわるという一石三鳥のような方法である。難は資金力のある団体でなければ使えない方法ということだろう。（UNDPの季刊雑誌、Choices 1992年11月刊から）

1993年度総会が開かれました

開発教育協議会の今年度の総会が、5月8日、開かれました。出席者は約60名で、理事および監事の改選、会則の改正についての討議などが行なわれました。また、3つの会場で視聴覚教材の紹介も行なわれ、会員どうしの意見交換の場となりました。

今回選出された理事および監事は、次のとおりです。

理事（団体）

村上公彦（㈱アジア協会アジア友の会）
池住義憲（アジア保健研修所）
高橋成雄（㈱協力タイを育てる会）
柳坪博之（㈱国際協力推進協会）
川口善行（シャプラニール）
＝市民による海外協力の会）
有馬実成（曹洞宗国際ボランティア会）
赤石和則（東和大学国際教育研究所）
平田 哲（日本クリスチャンアカデミー）
・関西セミナーハウス）
林 達雄（日本国際ボランティアセンター）
有馬正英（㈱日本ユニセフ協会）
宮崎幸雄（㈱日本YMCA同盟）

理事（個人）

栗野真造（国際子ども権利センター）
白井香里（八王子市立由木中学校）
小貫 仁（埼玉県立川越南高等学校）
金谷敏郎（園田学園女子大学）
田中治彦（岡山大学）
寺尾明人（㈱日本ユネスコ協会連盟）
藤井 誠（松山国際理解教育情報センター）
松下俱子（ガールスカウト日本連盟東京都支部）
湊 明弘（㈱青年海外協力協会）

監事

茂呂雅之
好光 紀

また、事務局長は、前任の雨森氏の後、早稲田大学講師の山西優二氏が引き受けてくださっていましたが、今回の総会で引続き山西さんをお願いすることが確認されました。

なお、運営委員会も、26名のボランティアが集まり、①全国研究集会、②機関誌、③ニュースレター、④ワークショップ、⑤情報センター、⑥実践事例集、⑦教材開発、⑧スタディツアーの各チームが編成され、それぞれ活動を開始しました。

今回、協議会の会費が改定され、団体会員が年間20,000円、個人会員が6,000円、準会員（学生）が3,000円となりました。

会員の声

先日の総会の出欠連絡のハガキで、会員の皆さんからいろいろな意見が寄せられました。その一部をご紹介します。

- ・NGOの活動の様子などをニュースの中で紹介してほしい。
- ・横浜で行なわれた開発教育国際フォーラムのアクションプランにもとづく具体的行動の策定と実施の中核的役割をより協力に推進すべきではないでしょうか。広く社会への働きかけの具体的仕組みの音頭取りを。
- ・昨年、神戸でワールドゲームに参加し感動しました。協議会で、夏の宿泊の際などにでもとりあげることにはできないでしょうか。
- ・ニュースレターの月刊化を望みます。
- ・関西での催しを増やしてください。
- ・総会の「地域分会」のようなものを行なってほしい。
- ・地域セミナーの開催に期待します。活動拠点づくりに参画していけたらと思います。
- ・生涯教育（社会教育）の中でのプログラムを開発し、学校教育以外の多くの人をも巻き込んでほしい。
- ・「開発」教育の名称を早く改称し、国民に受け入れられやすいものにしてほしい。
- ・「開発教育」誌の質にはいつも感心しています。これからも楽しみにしています。
- ・しばらくボストンに出張します。米国の開発教育を学んでこようと思っています。

- ・ニュースレターのいろいろな学習会等の開催情報とても参考になっています。また書物等も同様です。
- ・関西セミナーハウスで勉強させていただきながら高校の授業の中で実践しています。
- ・「開発教育」の機関誌を作るのもなかなかたいへんと思いますが、22号は特に読みごたえがありました。23号の女性の役割では、日本国内の開発の必要を感じました。

理事会

5月27日 ・今年度の体制の確認
・協議会細則の改正 他

運営委員会

5月19日 ・93年度活動計画と予算の確認
・各タスクチームの担当者の確認
6月14日 ・研究集会の準備状況について
・各タスクチームの報告 他

Membership

新入会員

中嶋 博（東京） 後藤典子（東京） 山崎順子（香川） 竹内一雅（東京）
前川裕子（大阪） 上野 文（東京） 浅沼 茂（愛知） 日本教職員組合（東京）
渡辺能理夫（東京）

継続会員

豊田高広（静岡） 中野真也（山口） 在田昌弘（神奈川） 長島京子（神奈川）
松下俱子（東京） 原 庸子（東京） 木村一子（愛知） 宮田正夫（東京）
川端 勝（大阪） 六角陽子（兵庫） Ota Hiroshi (USA) 佐藤百子（秋田）
鈴木洋二（福島） 房野 桂（神奈川） 寺村 陸（東京） 森 正恵（京都）
和賀井稔（神奈川） 青年海外協力協会（東京） 日本シルバーボランティアズ（東京）
日本国際飢餓対策機構（東京） 田中治彦（岡山） 桑原直子（東京） 長谷川潤（埼玉）
渋谷 恵（茨城） 帝塚山学院泉ヶ岡中高等学校（大阪） ユニセフ関西市民の集い（大阪）
白鳥清志（千葉） 永田佳之（東京） 西野桂子（東京） 出岡 学（東京）
ピセンテ・ボネット（東京） 醍醐誠一（埼玉） 金沢はるえ（埼玉） 宇野公容（東京）
石井 正（京都） 中津美和（京都） 西岡尚也（京都） 初岡昌一郎（東京）
佐々木達也（宮城） 松井やより（東京） 淵辺真美（神奈川） 二子石章（埼玉）
古谷田紀夫（奈良） 小林孝男（宮城） 飯尾光子（兵庫） 中井範子（京都）
日本フォスタープラン協会（東京） 羽田野蠶（大阪） 平田 哲（京都）
細田貴子（茨城） 藤井 誠（愛媛） 国際協力推進協会（東京） 武元茂人（三重）
国際開発センター（東京） 米良重紀（岡山） 秋田貴美子（愛知） 木村 瞳（愛媛）

以上、いずれも1993年4月30日～1993年6月25日受付分、敬称略、受付順

※ 会費を納めたのにこの欄に名前が記載がないという方がいらっしゃいましたら、お手数ですが協議会事務局までご連絡ください。

開発・民族問題とアムネスティの課題
インド・スリランカの場合

講師 山下明子さん
(アムネスティ日本支部役員)
と き 7月25日(日) 15:00~
ところ アビオ大阪
参加費 500円
主催 アムネスティ関西連絡会
問合せ ☎06-376-1496

国際理解のための
日本・太平洋混成 教員合宿セミナー

アジア・太平洋諸国の青年たちと3泊4日の合宿
を行い、討論会や交流を通じて友情を培うことを目
的とし、同時に、国際理解教育実践のための情報を
提供し、その振興を図る。

と き 9月17日(金)~20日(月)
ところ 河口湖「湖(み)のホテル」
対象 25~35歳の男女(現職の教員または教
育関係者)で、事前研修を含む全日程に参
加できる人
参加費 無料(主催者が負担)
締切り 7月21日

※事前研修 8月21日(土)
国立オリンピック青少年総合センター
(東京都渋谷区)

主催 (株)日本ユネスコ協会連盟
国際協力事業団
申込み (株)日本ユネスコ協会連盟
☎03-3340-3921

サヘル連続セミナー 森を使う
「マングローブと人の暮らし」

講師 向後元彦さん
と き 8月1日(日) 13:30~
ところ 東京都・代々木八幡区民会館
☎03-3466-3239
参加費 1000円
主催 サヘルの会

国連教育シンポジウム
「国連をどう教えるか」

基調講演(横田洋三:国際基督教大学)、実践報
告(アガ・マルケル:京都西高校)、パネル討論会など

と き 7月31日(土) 14:00~
ところ 国民会館(大阪市中央区大手町)
参加費 無料
申込み ☎03-3475-1611
主催 国際連合広報センター

開発教育推進セミナー

- ③「環境と開発」 9月18日~19日
- ④「先住民族とマイノリティ」
10月30日~31日
- ⑤「援助と協力」 12月4日~5日

ところ 関西セミナーハウス(京都市)
参加費 各回9000円(食事・宿泊費込)
問合せ ☎075-711-2115
主催 (株)日本クリスチャンアカデミー
関西セミナーハウス

「ワールド・スタディーズ」

目隠し散歩、貿易ゲームなどの参加型の手法で開
発教育、人権教育を。

講師 栗野真造(アムネスティ大阪)
と き 7月24日(土) 10:00~
ところ 頌栄人間福祉専門学校(神戸市)
問合せ ☎078-842-2844

南アの写真家 V. マトム氏と語る会

南アフリカの黒人写真家、ピクチャー・マトム氏が
来日。7月から約3か月間にわたって、日本の写真生
技術を学ぶとともに、日本各地で、アの人々の生現
活の様子を伝える写真展を開く。今回の来日を実現
させた実行委員会では、マトム氏を囲んで南アの最
新事情について学ぶ宿泊研修会を開く。

と き 7月30日(金) 18:00~
ところ 神奈川県立女性センター(藤沢市江の島)
参加費 3000円(宿泊費・食費込)
申込み ☎045-982-5323(宮野)

※ 読者の皆さんからの情報をお待ちしています。締切りは偶数月の15日。協議会事務局(ニュースレター係)宛にお送りください。

開発教育 ニュースレター 隔月刊
1993年 7月1日発行 第43号

発行: 開発教育協議会
〒169 東京都新宿区西早稲田
2-3-18-61
TEL: 03(3207)8085
FAX: 03(3207)0226

編集: ニュースレター編集チーム

お願い: ファックスには必ず「開発教育協
議会」と宛名を明記してください。

編集室から……

■ 研究会々場の下見のた
めに、松本へ行ってきまし
た。「コンベンション・シ
ティ」をうたい文句にして
いる松本市には、立派な会
議場がたくさんあります
今回の会場の教育文化セン
ターも、新しく、とても使
いやすい施設です。

■ 浅間温泉は、静かで落ち
着いた温泉町です。宿もな
かなか快適でした。二四時
間いつでも入れる温泉と、
おいしい信州そばが待って
います。

■ 用意した宿の宿泊定員は
80名です。お申込みはお
早目に。

(K)

開発教育協議会は、開発教育の推進に関心をもつ団体、個人であればどなたでも入会でき
ます。会員の方には、協議会が発行する研究誌をはじめ、ニュースレターや研究会・ワー
クショップ等のお知らせをお届けします。また、研究会の参加費割引の特典もあります。
会費、入会の手続き等、詳しくは協議会事務局までお問い合わせください。